

3. 魚道への誘導方法と魚類の降下対策

魚道入り口の設置位置

副ダムの設置

下流みお筋の形成
(捨石と帯工による試み)

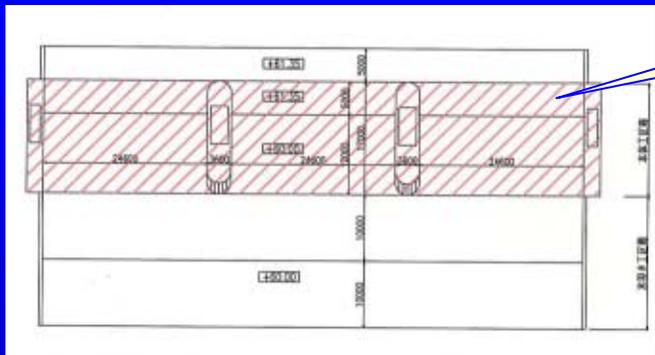
魚道入り口の設置位置

堰として水圧などに対して安定が必要とされる区間

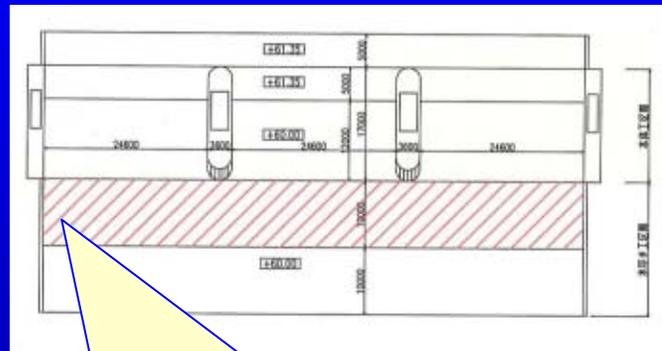
2 - 1
横断参照

本体工区間より下流に設置 ×

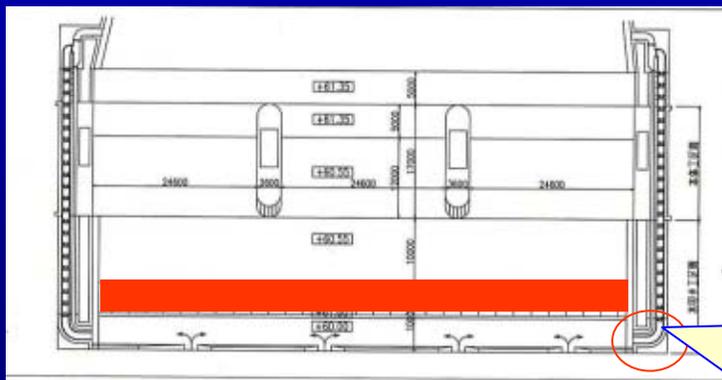
堰直下流案



上流側水叩き工案



下流側水叩き工案



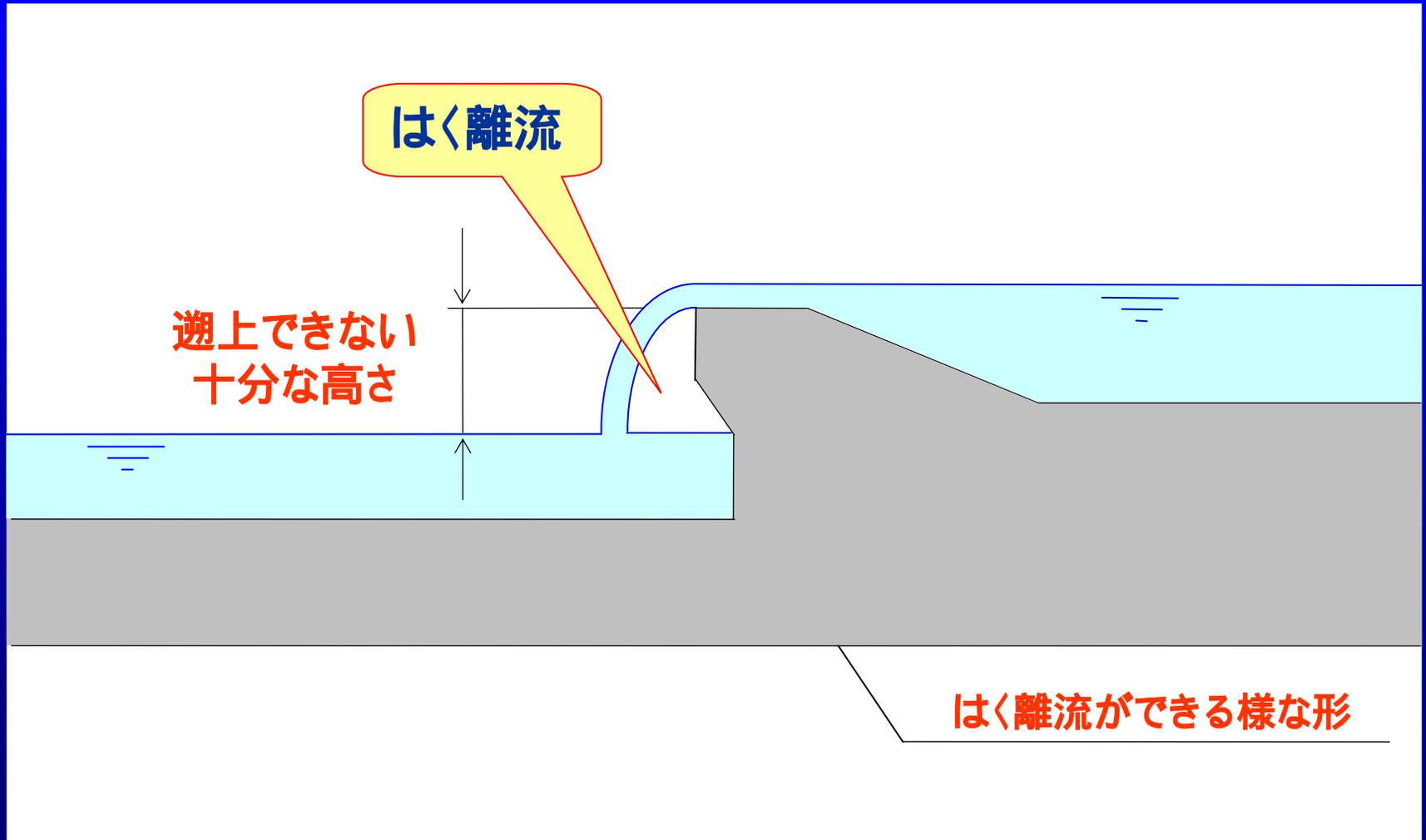
ゲートまでの距離が近い
ため、土砂堆砂によるゲートへの影響が懸念される

副ダムは水叩き下流に設置

副ダムの設置により、魚類の堰軸直下への迷入を防ぐ
副ダムが堰軸から離れているのでゲートへの影響はない

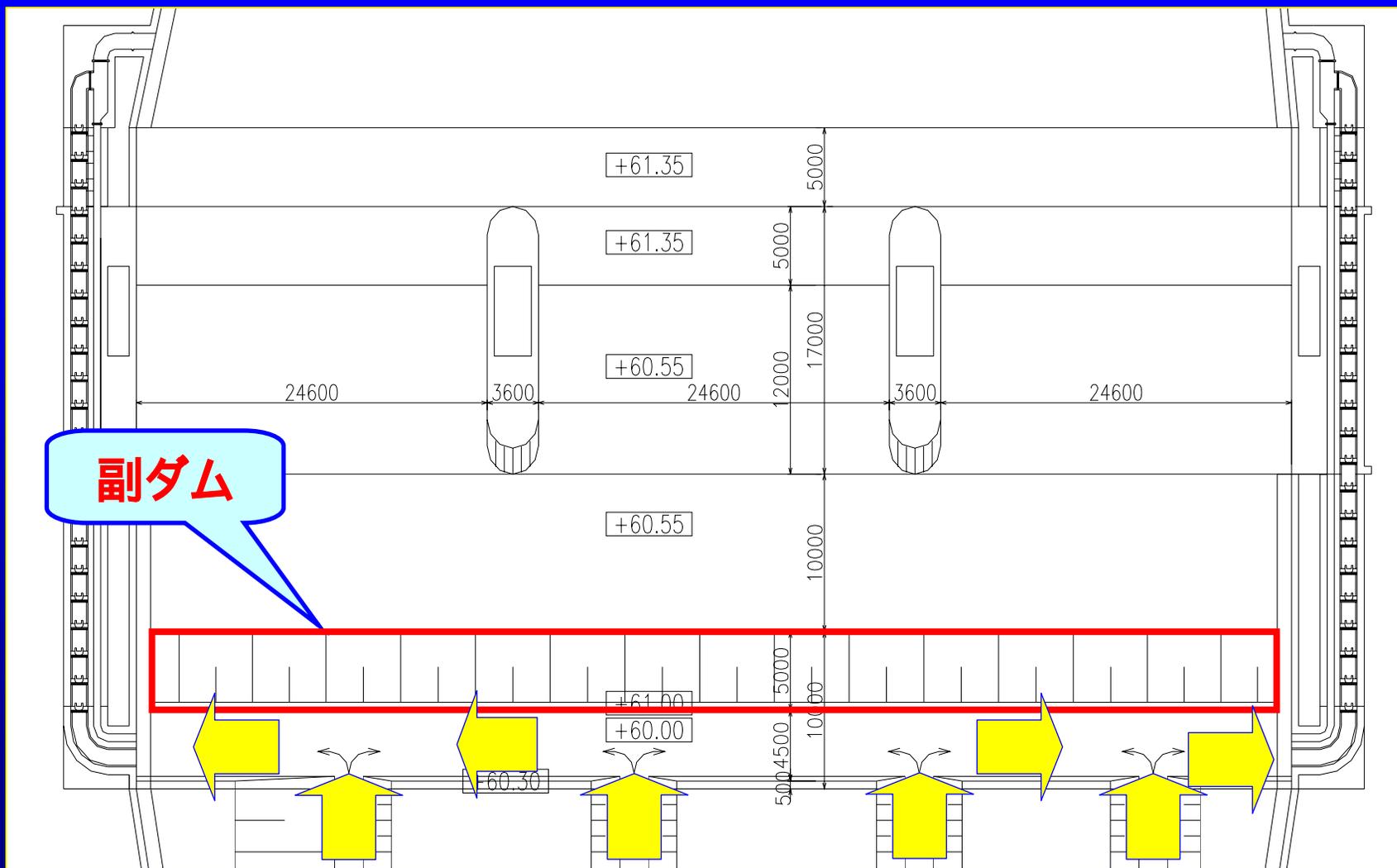
治水上、ゲート操作上安全である

副ダムの形状



平面形状

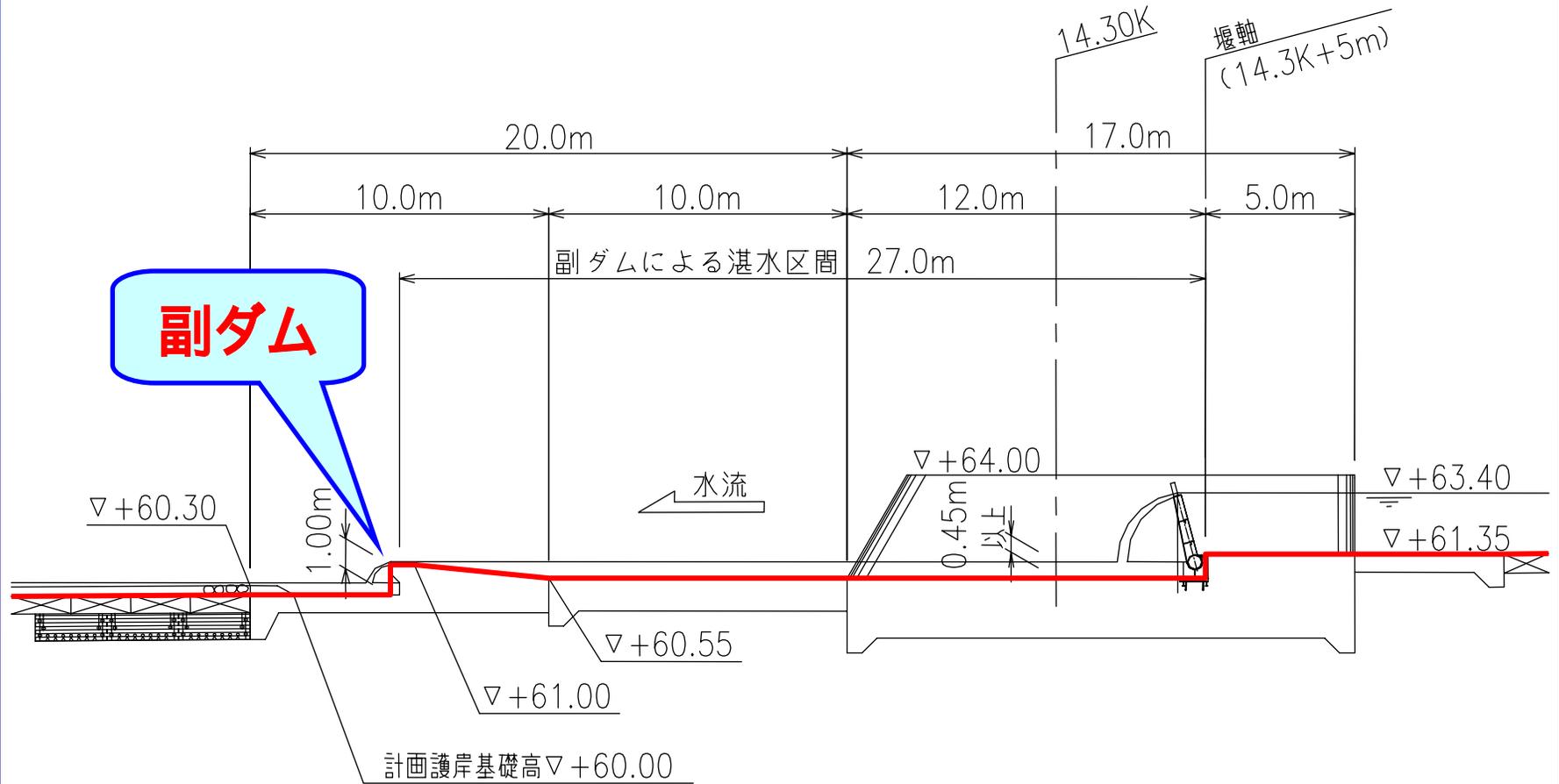
2 - 2



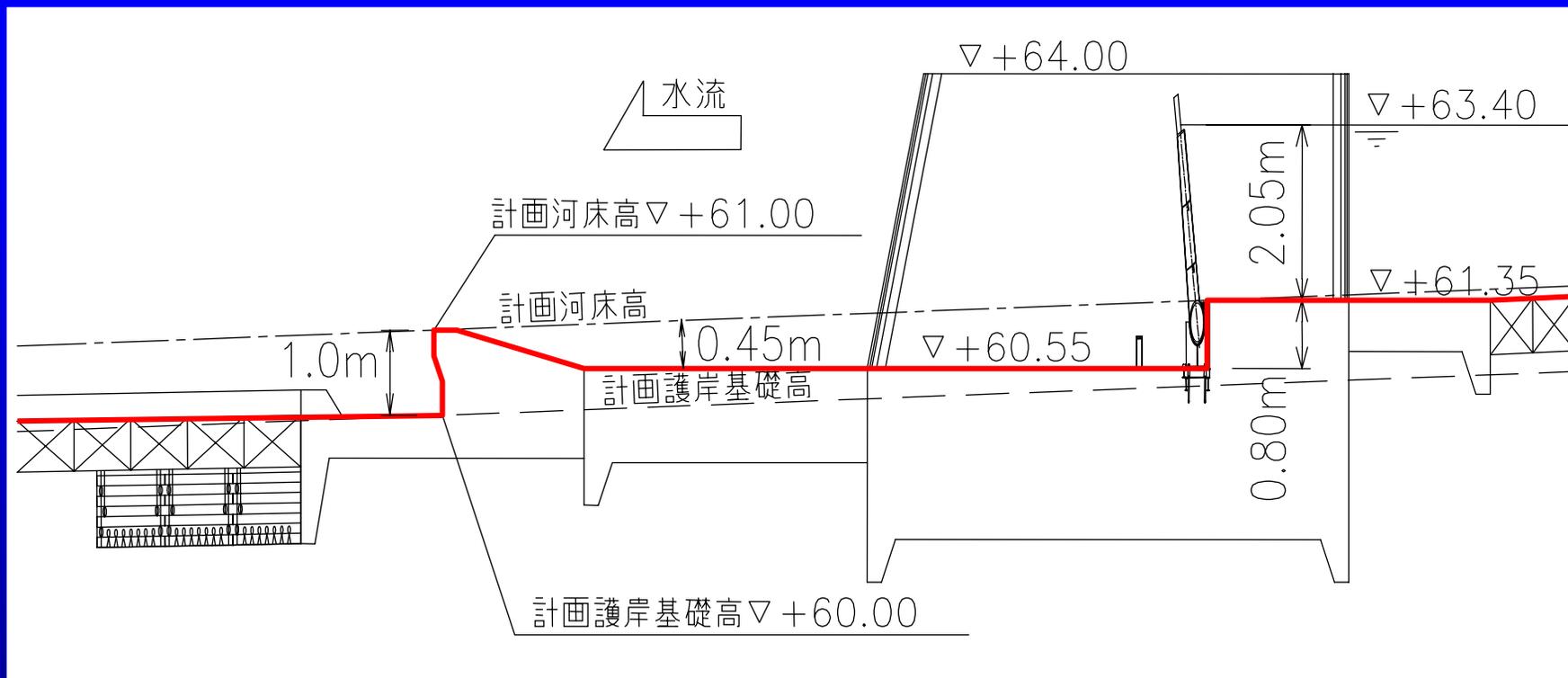
遡上してきた魚は魚道の入り口へと導かれる

縦断形状

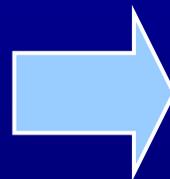
2 - 2



副ダムの高さ



1. 河川管理上は低い方が望ましい
2. 魚類の遡上からは高い方が望ましい



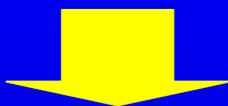
河積を阻害しない
最大限の高さ1m



みお筋(魚のとおり道)の形成

2 - 5

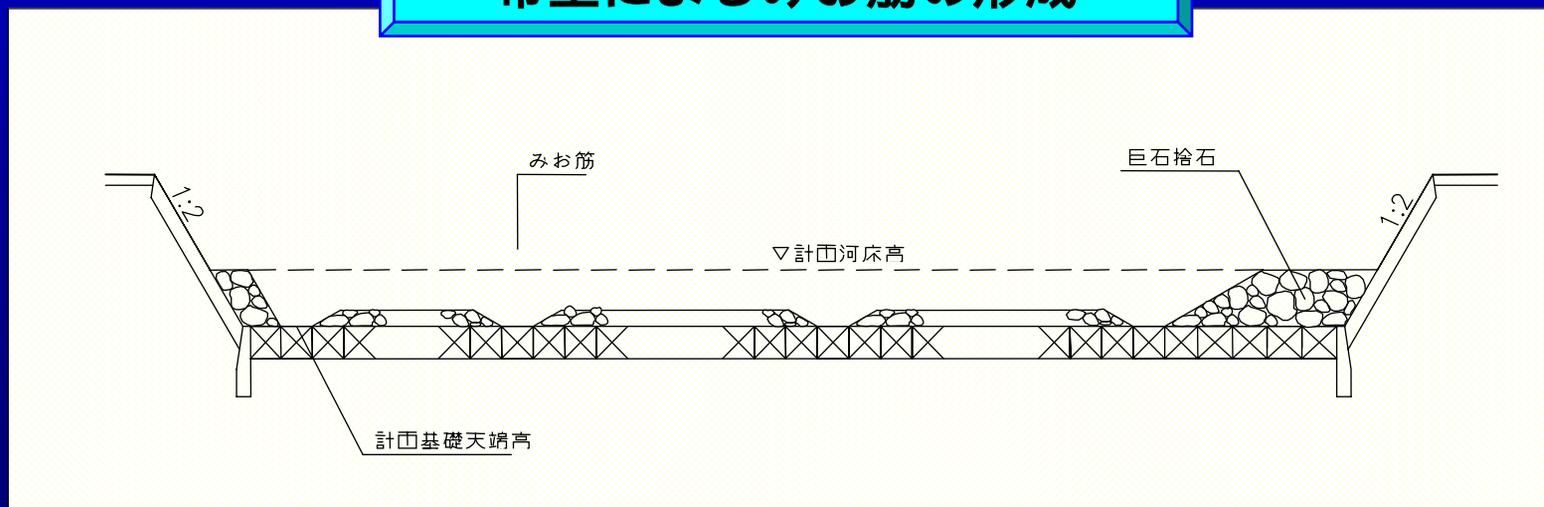
- ・護床ブロックの設置により、流量の少ない時期に水深を確保できない恐れがある。 魚のとおり道が無くなる恐れ



護床ブロック上を覆土し、伏流水を抑制する。

コンクリート壁による帯工を設置する。

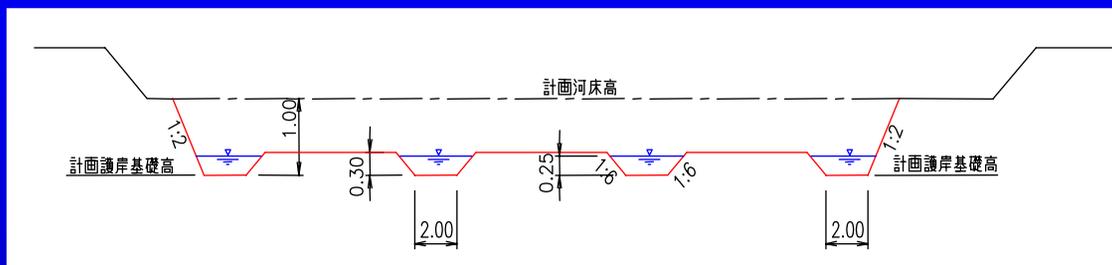
帯工によるみお筋の形成



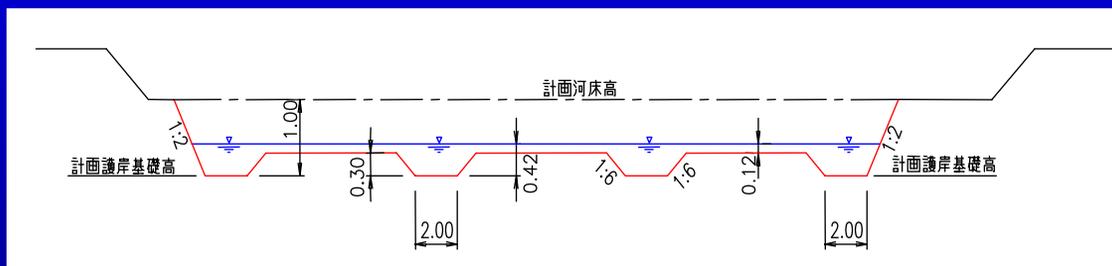
下流護床工部流況計算

みお筋部は湧水時でも25cm程度の水深を維持可能。
低水時には河道全体を流下する。

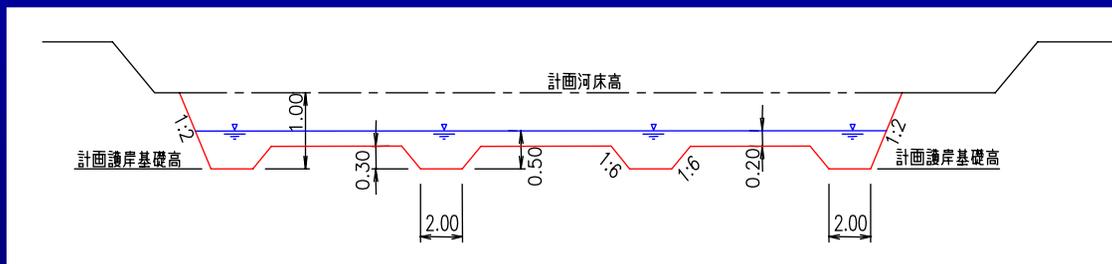
湧水時
($Q=3.40\text{m}^3/\text{s}$)
年間355日は確保



低水時
($Q=10.76\text{m}^3/\text{s}$)
年間275日は確保

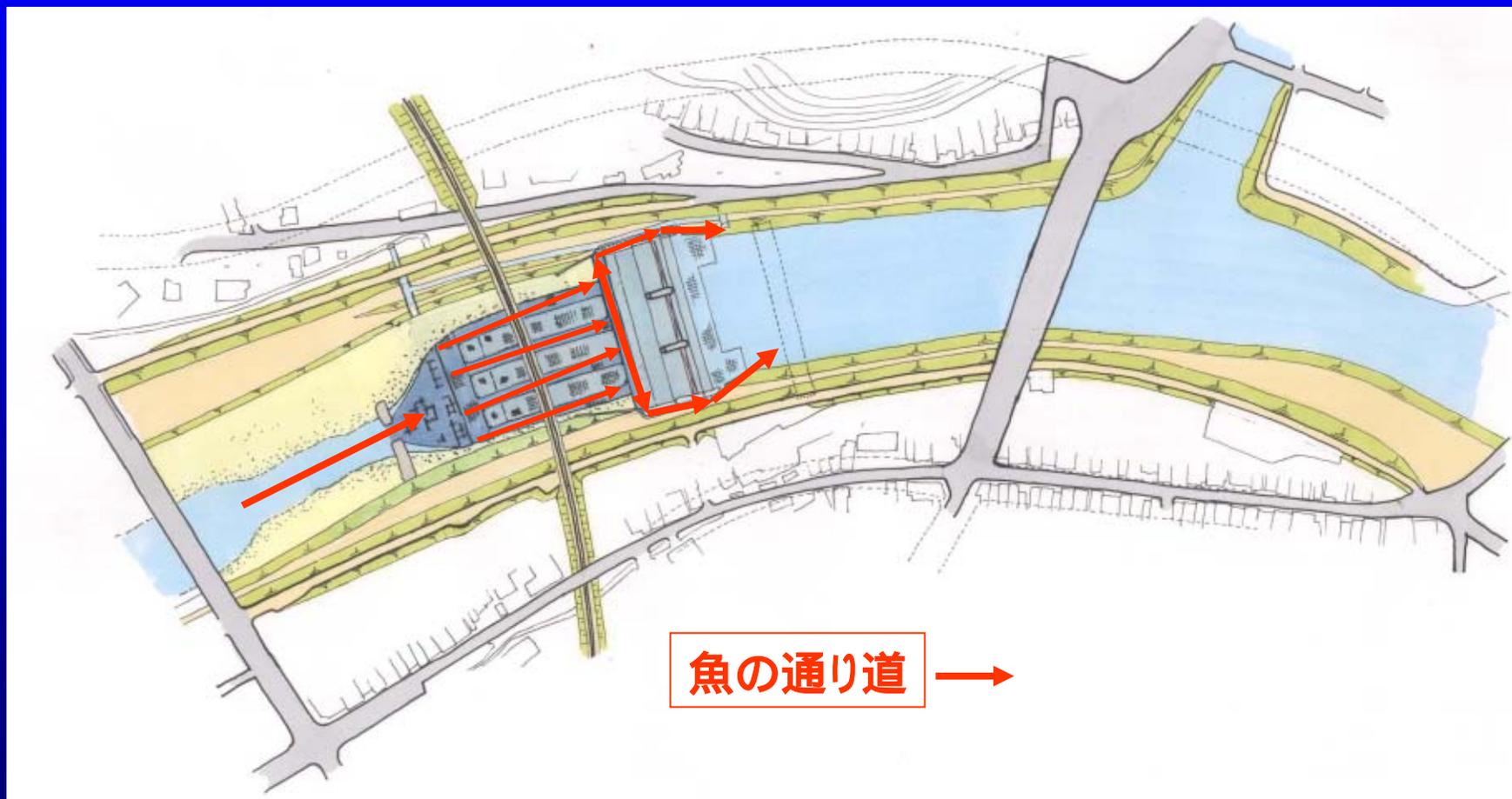


平水時
($Q=18.51\text{m}^3/\text{s}$)
年間185日は確保

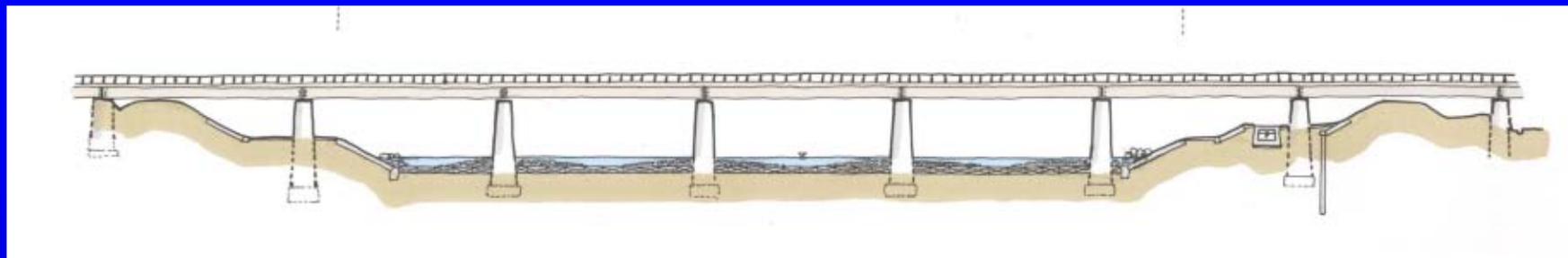


堰下流みお筋(魚の通り道)計画イメージ図 2-6

平面イメージ図



横断イメージ図



縦断イメージ図

